

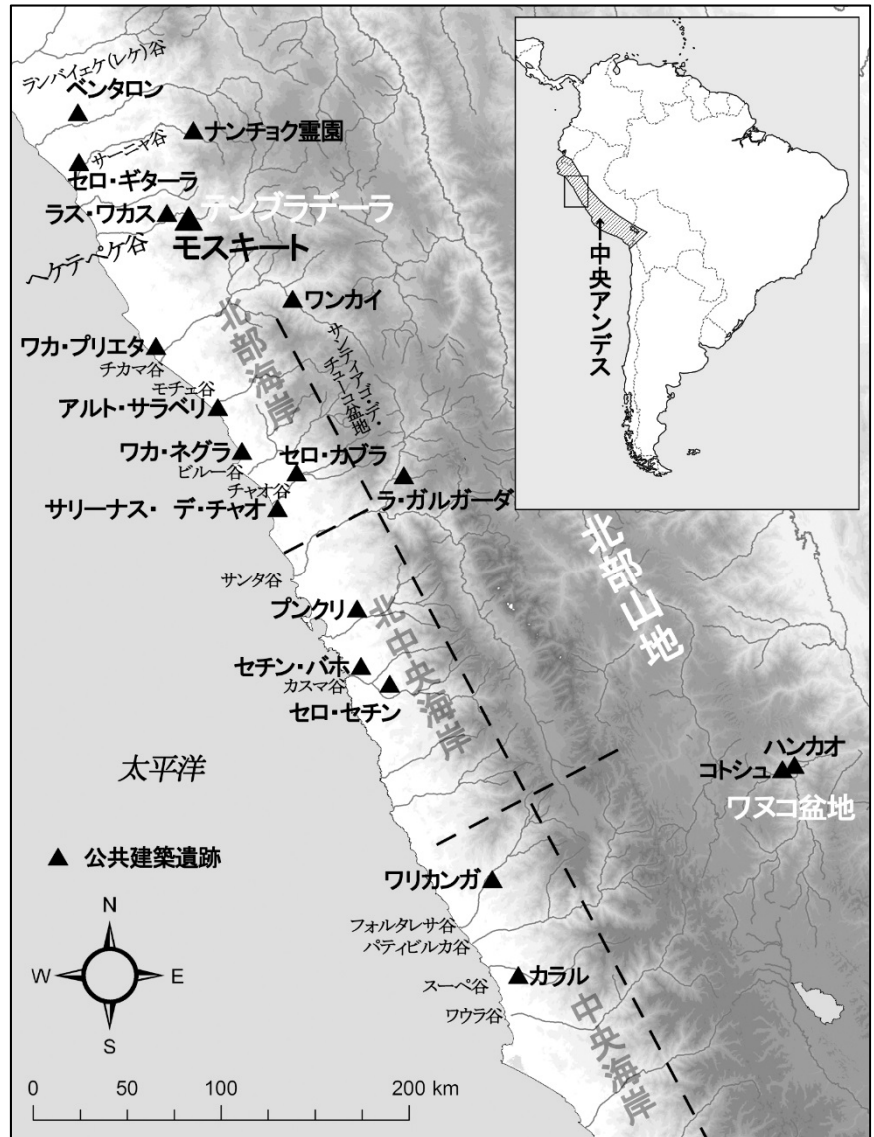
アンデス文明の最初期の神殿について：その成立過程と性格に関する試論

鶴見英成（東京大学総合研究博物館）

※ 発表において未刊行データを多く取り扱うため、この要旨はその全内容を反映していない。

紀元前 3000 年頃より「神殿」と称される大規模で公共的な祭祀建築が、ペルー北部の海岸・山地の各地に登場した。それらの建築を繰り返し更新するという活動が、アンデス文明の形成の契機となったとする仮説がある [加藤・関編 1998]。神殿は既存の神殿を核や土台として取り込んだり、既存の神殿の立地を意識したりして新たに築造される。ならば、とくに最初期の神殿群はどういった背景のもとに生まれたのであろうか。神殿の成立した理由は、神殿が維持された理由、放棄された理由とも関係し、アンデスの公共建築を性格付けたと考えられるため、これは文明史研究における重要な問題である。

今回の発表では①神殿はなぜその地点に建つのか、②神殿はなぜ更新されるのか、③神殿はなぜその地域に建つのか、という3つの問いを設定し、モスキート遺跡、コトシュ遺跡、ハンカオ遺跡の発掘や、地上絵・岩絵を含む広域踏査などの成果をふまえ、仮説を複合的に提示する。ラス・ワカス遺跡をはじめとするテンブラデーラ地域の神殿遺跡群の調査の結果、発表者は形成期早期（前 3000～前 1800 年頃）や形成期前期（前 1800～前 1200 年頃）などとくに初期の神殿は、村落の中核という性格が強いと考えているが [鶴見 2017b]、今回の発表はそのような前提のもと、神殿建築の物質性 [鶴見・モラレス in press] や村落機能を維持する経済活動 [鶴見 2014, 2017a] に主眼をおいて論じる。



言及する主要な形成期の公共建築遺跡

加藤泰建・関雄二（編）『文明の創造力』角川書店（1998）。

鶴見英成「古代アンデス狩猟採集民の農耕民化——神殿，交易ネットワークの形成」『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』池谷和信編，pp.74-87，東京大学出版会(2017a)。「神殿がそこに建つ理由——ヘケベテケ川中流域における社会の変遷」『アンデス形成期の神殿と権力生成』関雄二編，355-384，臨川書店（2017b）。「北部ペルー踏査続報—ワンカイ，ワラダイ，ラクラマルカ谷からの新知見」『古代アメリカ』17:101-117（2014）。

鶴見英成・C. モラレス「アンデス形成期早期の神殿建築の成立背景の考察—モスキート平原の新知見から」『古代アメリカ』21（in press）。